
漫才 3

めい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漫才3

【Nコード】

N7965P

【作者名】

めい

【あらすじ】

ちよこつと笑ってくれると嬉しいです。

漫才2と同じ、ミキとケンタの2人の漫才。コンビ名は『ケンタ○キー』。2を読んでなくても問題ありません。

「こんにちはどーもー！ ケンタです！」

「ミキです。よろしくお願いします」

「いやあ、テレビのCM見てると、ゲームの進化って激しいですね。PS3とか、映画を見ているんじゃないかってぐらいきれいな映像ですね。ファミコン世代だった自分からしたら信じられない進歩ですね。それで最近私とうとう、xbox 360 を買っちゃったんですよ」

「へえ、そうなんですね。私もですね、最近とうとう俳句を始めたんですよ」

「それ俺の話と全く関係なくね！？」

「……はあ」

「その溜息は何ミキちゃん！？ そんなに俺の話ってうっとおしいの！？」

「俳句というか川柳ですね。普段楽屋や家にいる時も、紙とペンを持って、思いついたら即書き込んでいます」

「そしてやっぱりスルーなんですネーなんですね……そうですね、最近はサラリーマン川柳をはじめ、オタク川柳とか、トイレ川柳とかいろいろでてきて、意外とみなさん川柳にはまっていそうですね」

「実はその賞金が目的」

「くろっ!?! いきなり何そんな黒いこと言ってるの!?! 今ミキちゃんの周りから真っ黒なオーラがドロドロと湧き出てるよ!?!」

「で、今日はですね。賞金をゲットするためにですね」

「ミキちゃんめっちゃ本音でてるから! もっとオブラートに言おうよ!?! 今きつとお茶の間ではミキちゃんのイメージがダダ下がりだよ!?!」

「そうですか、それではもうちょっとオブラートに……今日は金がほしいから」

「ミキちゃんもっとひどくなっちゃってる!?!」

「金よこせ」

「それ完全に恐喝だから!?! 　　というか俺の胸倉つかむのはやめてくれ!」

「というわけですね。今日は川柳を作っていきたいと思うんですよ」

「うん、何が『というわけで』なのかさっぱりだけどね」

「私が5・7・5の部分を作るのでケンタは残りの部分を作ってください」

「うい、了解です……ってミキちゃんちょっと待った！ 川柳って5・7・5で終わりだよね！？ 俺はどこを作ればいいのさ！？」

「……………字余り？」

「みじかつ！ 俺の担当めっちゃみじかつ！ 字余りって一文字だよね！？ 要は『ミキちゃんと コンビを組んで 早2年』とかそんな川柳に対して『だ』ってつけるだけだよね！？ しかもなんか余分にしか感じられないんだけど！」

「…………ケンタの存在と一緒？」

「ひどいっ！？ 俺の存在って余分にしか感じられない存在なんですか！？ 『だ』一文字と同レベルなんすか！？」

「ごめんなさい。それは『だ』に失礼ですね」

「今俺に謝らずに、『だ』に謝ったんすか！？ どんだけ俺の存在って低いんですか！？」

「それでは最初の川柳を紹介したいと思います」

「こうやってスルーされるほど俺の存在感はないわけですね……うう……さびしい……ああ、神よ！ もっと優しいパートナーに巡り合うことはできないでしょうか！」

「『いじけてる 妄想男 きもいだけ』」

「うあ！？ なんてひどい川柳なんすかミキちゃん！？ 俺そんなにきもかったですか！？」

「……え？」

「ミキちゃん、なんでそんな不思議そうな顔してるの？」

「別に、川柳のどこにも『ケンタ』なんて言ってないけど？」

「ほう、墓穴掘った！？ ……あ、じゃあこれは俺の事を読んだ川柳じゃないんだね？」

「ケンタの事に決まってるけど」

「うおい！？ だったら何でさっき不思議そうな顔をするんだよ！？ ミキちゃん、俺をあげて落とすのをやめてください！」

「ほら早くケンタ、最後の字余りをつけてよ」

「そしてここでスルーですかそうですね。毎度毎度こうね、ミキちゃんってパスをスルーしすぎだと思っただよね。もっとこう、ワンツーパスみたいにきれいにかえってくるもんだと思っただ」

「あんまりうまくない」

「うるさいな分かってるよ！ とうかそういうところだけすぐにパスを返さなくてもいいから！」

「ほら早くケンタ、最後の字余りをつけてよ」

「そしてすぐにスルーなんですすねそうですね。とうか俺の悪口が書かれた川柳に、どんな一文字をつければいいんすか。『よ』なん

てつけたら余計きもいし」

「そう言えば、『妄想』って『女を亡くした想い』って書きますよね。だから女が出来たことのないケンタの場合は『妄想』ではなくて『夢想』って言った方が正しいですよね」

「ちよちよちよ!? 人が最後の一文字考えてる最中になんてこと言ってるんすか!？」

「ケンタが考えるの遅いから時間稼ぎしてるんじゃない」

「ごめんなさい……ってなんだかめっちゃ理不尽な気がするよ!」

「そうするとさっきの川柳も『いじけてる 夢想男き もいだけ』字足らず」

「区切り位置が変なんですけど!? 『おとこき』『もいだけ』ってどんななん!?」

「ほら早くケンタ、最後の字余りをつけてよ」

「俺の突っ込みは無視ですかそうですか。しかも字足らずな状態でも字余りを考えるんですね。でも、2文字あればいろいろ考えられますね。『ない』みたいに否定語がつけばキモくないってことになりますもんね。よし、頑張っているいい言葉をつけるぞ……って何で照明が落ちてくんですか!? ちよつとちよつと!」

「ケンタが考える時間が長すぎて、尺足らずになったみたいですね」

「なんでだよ!? え、じゃあ何さ、川柳の俺の担当分は!? 尺

が足りなくなっただから字足らずなままーってか!？」

「……あんまりうまくないね」

「うるさいな、分かってるよ!」

「やっぱり『おとこき』『もいだけ』なんて切り方はないよね」

「今さらその話!？ え？ じゃあ俺のボケは？」

「え？ 何の話？」

「またスルーかよ!？ もうええわ!」

「ありがとうございますー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7965p/>

漫才3

2011年1月3日22時26分発行